

文学部

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

文学部は、2016年度までの各評価基準に関する取り組みを2017年度もおおむね継続し、全体的な質的保証を損ねることなく、さらなる改善等も行っている点は、評価できる。同学部は全体の理念や方針に基づきながら6学科が自律性を保ち、堅固な教育体制を敷き、積極的な学部運営を行っている。2017年度は質保証委員会の開催回数が増え、同委員会の役割について議論が行われており、今後はいっそう能動的で主体的な質保証活動が期待される。教育課程は順次的・体系的に編成され、資質の高い教員体制のもとでバランスの取れた教育内容が提供されている。これから重要性が増すであろう国際性の涵養や留学生の学修支援について、学科によっては斬新な試みが導入されているので、そうした動きが学部全体で組織的に展開されることが望ましい。教育方法や学習成果について課題はあるものの(たとえば学生の授業外学習時間の確保や留学者等の既修得単位の認定基準策定、成績分布の把握など)、中期目標においてその一部対応が目指されているので、引き続き善処が求められる。また2016年度に指摘され継続して憂慮案件として挙げられる教員の負担軽減にも取り組み、教育と研究のさらなる充実に努められたい。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

文学部は6学科が自律性を保ちながら教育体制を敷き、カリキュラム等の不断の見直しを行うことで、教育の質の向上に努めている。一方、2018年度は教育方法(アクティブ・ラーニング)、学生支援(キャリア形成)をテーマとした教員向け研修会を開催し、現代の教育課題に対する情報の共有を学部全体で図った。ただし、留学生支援の方法、学修成果の可視化等の課題については、今後、学部で問題意識をさらに深めていかなければならないと考えている。また、教員の負担軽減については、会議開催の弾力的な運用(年11回開催してきた「教学改革委員会」を「学科主任会議」に振り替え、7回の開催とした)や、各学科における自己点検・評価作業の合理化など、業務を見直して対策を図った。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

文学部における教育方法や学生支援の課題については、教員向け研修会を開催し、現代の教育課題に関する情報を共有するなど組織的な取り組みが行われたことは高く評価できる。

また、限られた人的資源を有効に活用するため、会議の開催方法の弾力的な運用や自己点検・評価作業の合理化などを行い、教員の負担軽減を図ったことは評価できる。今後はこうして生まれた余力を活用して、留学生支援の強化や学習成果の一層の可視化を実現することが期待される。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

各学科とも、学部・学科の教育課程の編成・実施方針にもとづき、適切な教育課程・教育内容を提供している。すなわち、学科ごとに概論科目と多様な講義科目を設け、専門分野の学問内容を深く、かつ網羅的に学べるカリキュラムを構築している。また、ゼミナール科目を年次ごとに多数開講することによって、専門分野の研究方法を身につけ、プレゼンテーション、ディスカッション、課題発見・解決能力を高める教育に力を入れている。特に、ゼミナールとその延長にあたる卒業論文は必修科目として位置づけられており、文学部の教育の最大の特徴となっている(SSI学生は選択制)。また、哲学・英文学・史学・心理学の各学科では、大学院科目の履修も認めており、自身の学修活動をより高度なものへと触発する場も設けている。さらに、幅広い教養の涵養を図るためのILAC科目(2016年度以前入学生用の名称は「市ヶ谷基礎科目・総合科目」。以下、「ILAC科目」で統一する)、文学部共通科目、他学部・他学科公開科目等を含めることにより、幅広い視野と教養を身につけることが可能となっている。

なお、上記以外の各学科の教育課程・教育内容の特徴は以下のとおりである。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【哲学科】

専門科目の中心に位置付けられる「哲学特講」「哲学演習」については、各担当教員の専門分野を生かしながら、幅広い分野にわたる授業内容を提供している。「哲学特講」については、春・秋学期で担当教員を代え、学生の多様な問題関心に対応するように、教育内容に多様性をもたせている。

【日本文学科】

2年次以降は文学・言語・文芸の3コース制を採用している。学生はコース別の必修科目と「ゼミナール」、および各コース共通で履修できる選択必修科目・選択科目を通して、諸領域にわたる知識を深く身につけることができる。なお、文芸コースでは原則として卒業制作（創作作品）を提出することとなっている。

【英文学科】

「英語という言語が基礎にある学科」という特徴を活かし、英米文学、英米文化から英語学、言語学、英語教育学まで、幅広い領域を学べるように工夫されている。また、英文学科派遣留学制度（SA）を設けて国際化に対応し、国際社会に貢献しうる能力をもった人材を育成している。

【史学科】

専門基礎科目、専攻系科目、特講系科目、実習系科目、演習（ゼミ）に分け、学生の知識・能力の深化に合わせた教育内容を史料分析のための方法論、歴史像を構築するための理論と知識にわたり、包括的かつ実践的に習得できるカリキュラムを構築している。

【地理学科】

1年次に「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」等を通じて、大学で学ぶ地理学の体系と方法論の基礎を習得し、2年次以降は選択必修科目と選択科目によって地理学の専門的な方法論や知識を学ぶとともに、「現地研究」において習得した方法論の実践を図ることとしている。

【心理学科】

論文の検索の仕方、読み方、データの分析の仕方、プレゼンテーションの仕方といったスキルに関しては、1～4年次の全学年において演習形式で行い、卒業論文につなげている。また、心理学を生かした職業選択を支援することも視野に入れ、現場で働いている学外の特別講師を毎年招聘し、講演会を実施している。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

各学科の学科会議においてカリキュラムの検討を行った。その結果、スクラップ・アンド・ビルドまたは科目名称の変更等の方式により、以下のとおりの改正が行われ、2019年度以降のカリキュラムの充実化を図ることができた。

- ・日本文学科「情報リテラシー実習A・B」「情報メディア演習A・B」の新設（「情報リテラシー実習Ⅰ・Ⅱ」（各通年）に廃止による）
- ・英文学科「言語習得論演習A・B」の新設（「英米文学演習(7)A・B」からの名称変更）
- ・心理学科「身体運動の心理と生理」の新設（「身体活動と健康」からの名称変更）

【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

- ・<http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/curriculum/index.html>
- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』『ILAC科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配付パンフレット）
- ・法政心理ネット (<http://www.hosei-shinri.jp/>)
- ・2018年度第6・8回文学部定例教授会議事録

②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。

S A B

※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

各学科とも、1年次に初年次教育にあたる「基礎ゼミ」（日本文学科のみ「大学での国語力」「ゼミナール入門」として実施。以下、これらを「基礎ゼミ」等と略す）や概論科目を、2年次以降、より専門性の高い科目を開設している。また、2～3年次ないし3～4年次に「ゼミナール」「演習」（各学科で名称を異にするため、以下、最も代表的な呼称である「ゼミナール」「演習」と称す）を開設し、調査・研究・発表を主体とした教育を実施している。4年次には全学科で「卒業論文」を必修として課すことにより、論理的な思考力・表現力の養成に力を入れている。各科目は、必修科目・選択必修科目・選択科目・自由科目（心理学科のみ、必修科目・学科基礎科目・展開科目・自由科目と称す）の系列に分類され、学科の専門領域を幅広くかつ体系的に学ぶことができるようになっている。また、1年次より学科の専門科目とILAC科目の双方が学べるよう配慮されている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

なお、各学科のカリキュラムの順次性・体系性の特徴は以下のとおりである。また、その体系は学科ごとにカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの形式でも公開している。

【哲学科】

ゼミ形式の授業として、1年次に「基礎ゼミ」、2年次に「基礎演習」、3・4年次に「哲学演習」を開設し、4年間を通じて段階的で継続した能力形成が可能なカリキュラムとなっている。また、1・2年次に概論科目、ILACを履修したあと、2・3年次に特殊講義、選択科目の履修を通じて視野の拡大を図り、広い教養に支えられた専門性の証としての「卒業論文」の執筆につなげている。

【日本文学科】

1年次春学期に国語基礎力育成のため「大学での国語力」、秋学科にゼミ教育への導入として「ゼミナール入門」を開設している。2年次からは文学・言語・文芸の3コース制を取り、学生は「ゼミナール」の所属によって所属コースが決まる。各コースのカリキュラムは、共通の必修科目3科目（1年次ないし2年次以降開設）を土台に、コース別必修科目2科目を柱とし、さらに選択必修、選択、自由科目を配することにより体系化されており、卒業論文・卒業製作につなげている。

【英文学科】

1年次には初年次教育として「基礎ゼミ」を開設するほか、英米文学、英語学、言語学の基礎的な講義科目を履修可能としている。2年次以降、専門的内容をもつ講義科目や、英語力の集中的な育成を図るための英語表現演習科目を開設している。また、2年次春学期にはゼミにおける専門研究への導入のため、「2年次演習」を開設している。3年次からは英米文学、言語学、英語学、英語教育学等の各分野のゼミを開設し、卒業論文執筆に向けた指導を行っている。

【史学科】

1年次に導入科目として「基礎ゼミ」を開設するほか、日本史・東洋史・西洋史の各概説および各序説を開設している。2年次には、基本的な方法論の習得のため「史学概論」「考古学概論」を開設している。2年次以降、日本史・東洋史・西洋史の3専攻制を取り、専攻系（時代史）講義科目で専攻分野の知識を深化させ、より専門性の高い特講系講義科目への連絡を図っている。さらに、研究方法習得のための演習（ゼミ）と、史資料の扱い方、外国語論文読解力養成のための実習系科目を開設している。これらの科目を2・3年次に履修することで、4年次の卒業論文執筆に結びつけている。

【地理学科】

1年次に「基礎ゼミ」のほか、地理学の体系と方法論の基礎を習得するための「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」を開設している。2年次からは選択必修科目、選択科目によって多岐にわたる知識、方法論を学び、習得した方法論を「現地研究」(フィールドワーク)において実践する。2017年度入学生以降は3・4年次における「演習」の履修(2016年度以前入学者は2年次から「演習」を履修)により、4年次の「卒業論文」につなげる編成をとる。

【心理学科】

認知系科目群と発達系科目群を柱に、体系的な教育課程を編成している。1年次には学科基礎科目を設置し、2年次からは専門性の高い学科展開科目を比較的自由に履修できるよう設置している。また、1年次には初年次教育としての「基礎ゼミ」、心理学への興味を高め、基礎的なスキルを習得するための「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」、2年次には研究論文の読み方や実験方法を学ぶ「演習Ⅰ・Ⅱ」、3年次以降は心理学分野での研究活動を一人で行うことにより、それまでに習得した知識・技能を活用する方法を学ぶ「研究法Ⅰ・Ⅱ」を設置し、最終的に4年次の「卒業論文」につなげられるように編成している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ <http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/curriculum/index.html>
- ・ 『文学部履修の手引き』『文学部講義概要(シラバス)』

③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

S A B

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

各学科とも幅広く深い教養を習得することと、学科の専門性の高い知識・方法を習得することを両立し、総合的な見識や判断力を養成することを重視している。そのため、卒業所要単位数132単位のうち、44単位をILAC科目より修得することが定められている。ILAC科目は0群、1群(人文科学分野)、2群(社会科学分野)、3群(自然科学分野)、4群(外国語)、5群(保健体育分野)から構成されており、群ごとに必要単位数を設定することにより、幅広い領域の教養を身につけることができるよう配慮されている。また、ILAC科目の中には、教養をより発展的に学ぶ科目群として「総合科目」「教養ゼミ」も設けられており、ここで修得した単位は専門科目のうち、自由科目として認定されている(哲学科・日本文学)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基礎的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

科・英文学科では「総合科目」の一部は専門科目のうち、選択科目として位置づけられている。加えて、文学部内では学科間で科目の共有が行われているほか、2年次からは他学部・他学科公開科目も履修可能となっており、隣接する領域や他の専門領域をより深く学ぶ場が提供されている。

なお、文学部では2011年度より、社会倫理の涵養をめざし、「現代のコモンセンス」を開講していることも、特徴としてあげられる。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

全学的な意思決定にもとづき、2019年度より他学部・他学科公開科目の履修可能年次を2年次に引き下げるとともに、他学部公開科目における「SDGs+科目群」に、哲学科「宗教学1（伝統宗教）1・2」、地理学科「海洋・陸水学及び実験Ⅰ・Ⅱ」「気候・気象学及び実験Ⅰ・Ⅱ」の提供を決定した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『ILAC科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・2018年度第8・10回文学部定例教授会議事録

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。 S A B

※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

学士課程教育への円滑な移行に必要な初年次教育として、哲学科・英文学科・史学科・地理学科・心理学科ではILAC科目の中に「基礎ゼミ」を開講し、日本文学科では専門科目の中に「大学での国語力」「ゼミナール入門」を開講している。これらの科目では、文章読解、ディベート、プレゼンテーション、レポート作成、資料探索技術等を扱い、大学での学びに必要な基礎的な能力を身につけることがめざされている。

一方、高大接続に関しては、法政大学高等学校3年生を対象に一部の専門科目の聴講を認めている（ただし、まだ実績はない）。なお、上記以外の学科固有の取り組みとして、以下のものがあげられる。

【史学科】

史学科では日本史・東洋史・西洋史を広く学ぶカリキュラムが設定されているため、高等学校までの日本史・世界史の学習状況を考慮し、必ずしも学習が十分でない者を主な対象として、2017年度から各分野の通史を1セメスターで学ぶ「日本史序説Ⅰ・Ⅱ」「東洋史序説」「西洋史序説」を開設し、他学科にも公開した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』『2017年度ILAC科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・2018年度第4回教学改革委員会議事録

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。 S A B

※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

ILAC科目に英語および諸外国語科目を設置し、必修科目を指定している。また、英語強化プログラム（ERP）、グローバル・オープン科目、交換留学生受入れプログラム（ESOP）のうちの英語開講科目、「短期語学研修」「国際ボランティア」「国際インターンシップ」が履修可能になっている。これらの科目は専門科目のうち、自由科目として認定されている（英文学科では一部、選択必修科目に認定されている）。なお、上記以外の各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

2011年度より「国際哲学特講」を開講している。本科目ではハイデルベルク大学（ドイツ）、ストラスブール大学（フランス）と提携し、スカイプを用いた遠隔授業とアルザス欧州日本学研究所における合同授業を実施している。海外の大学の学生と交流・議論すると共に、現地の文化に直接触れることで、異文化への関心の喚起、自国文化の見直しを促し、学生の国際的な意識の涵養に取り組んでいる。

【日本文学科】

日本語・日本文学に関心をもつ留学生を積極的に受け入れるとともに、中国文学に関する科目をゼミナール・選択必修科目・選択科目において開講し、日本文学を相対化してとらえる視点を提供している。

【英文学科】

米国のフロントボン大学の秋学期SA（長期）、アイルランドのユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンの夏期SA（短期）と秋学期SA（長期）という3種のプログラムからなる学科独自の派遣留学制度（SA）を設け、短期SAについては1年次からの参加を積極的に勧めている。プログラム終了後には毎年SA報告会を開いている。また、留学先で修得した単位については、学科・学部の審議を経たうえで、SA認定科目として認定している。

【史学科】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

外国史の科目では多様な地域を対象とするとともに、東洋史専攻・西洋史専攻の各演習では中国語・英語の原書を読むことを義務づけている。さらに、中国の龍門石窟、復旦大学文物與博物館学系、少林寺と学術協定を締結し、学生の国際性の涵養に努めている。

【地理学科】

外国語を通じて地理学を学ぶための「外書講読」を開講するとともに、世界の各地域に対応した「世界地誌」等を開講し、学生の海外諸地域に対する理解を深めている。韓国・台湾・中国をフィールドとする「現地研究」を実施する年もあり、学生自らが異文化を体験する機会を設けている。

【心理学科】

多くの留学生を積極的に受け入れている。また、「演習 I」などの演習系科目や、「心理学英語 I・II」を通じて、英文学術雑誌の講読を行い、国際的な場での発表を可能にする語学力の養成に努めている。さらに、専任教員が主導して大学院入試を視野に入れた自主英語勉強会を定期的に開催し、授業外でも英語力の強化に取り組んでいる。

【2018 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

英文学科において、2020 年度より SA の留学先としてカナダのヴィクトリア大学（12 週間、24 週間）を追加することを決定した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』『ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配布資料）
- ・2018 年度第 11 回文学部定例教授会議事録

⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

ILAC 科目の中に「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン演習」（ともに 1 年次）、「就業基礎力養成」（1～4 年次）を設置し、初年次よりキャリア教育を実施している。また、文学部では、学部共通科目として「文学部生のキャリア形成」（2～4 年次）を設置している点も、特徴としてあげられる。当該科目では、文学部生としての立場を生かしたキャリア形成への意識を高めるため、本学文学部卒業生による講義がオムニバス形式で実施されている。

なお、上記以外の各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

哲学科生に向けた「哲学科就職セミナー」を年 1 回開催し、キャリアセンター職員や卒業生などによる講演を行い、就職活動を含め、キャリア形成に向けた情報提供と学生の意識向上を図っている。

【日本文学科】

「メディアと社会」「編集理論 A・B」「編集実務 A・B」「表現と著作権」を開設し、出版業界への就職を希望する学生に向けたキャリア教育を実施している。

【史学科・心理学科】

「基礎ゼミ」においてキャリアセンター職員によるガイダンスを実施し、学生が 1 年次よりキャリア形成に向けた意識を高める取り組みを行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』『ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・哲学科 HP (<https://philos.ws.hosei.ac.jp/>) に「哲学科就職セミナー」案内掲載

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・各学科専任教員：4 月にオリエンテーション（1 年次生対象）、在学生ガイダンス（2 年次以降の学生対象）を実施。
 - ・学務部学部事務課文学部担当：4 月に学部ガイダンス（1 年次生対象）を実施。
- そのほか、各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・新入生に対して、履修・学習状況等を確認しながら、専任教員が面接を行い、履修上のミスマッチが生じないよう学習上の問題点の早期発見と適切な対応に努めている。
- ・4 月に 4 年生を対象に卒論ガイダンスを実施している。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【日本文学科】

- ・学科内留学生サポート小委員会による「留学生履修相談会」を開催している。
- ・新入生を対象とした懇談会として、4月に「新入生歓迎会」を実施している。同時に、オフィスアワーの利用促進を図るため、研究室案内も実施している。
- ・1年次後半に「コース・ガイダンス」および「ゼミ説明会」を開催し、3コース制やゼミナールに関する説明を行っている。
- ・コースや研究分野に対応した5つの履修モデルを日本文学科公式サイトで公開している。
- ・4年次への進級や卒業履修要件の充足をめざし、履修状況の確認を学生各自で行う「3年次履修チェックリスト」を日本文学科公式サイトで公開している。
- ・『卒業論文執筆のてびき』を配布し、卒業論文（卒業制作）の指導を行っている。

【英文学科】

- ・5月に全専任教員が1年生全員を対象にしたグループ単位の「新入生面談」を行ない、履修状況を把握し、必要に応じて個別に追跡調査を実施している。
- ・11月～12月に、1年生を対象に「2年次演習」説明会、2年生を対象にゼミ制度説明会、3年生を対象に卒論説明会を実施している。

【史学科】

- ・1年生には基礎ゼミと、5月に行われる全ての1年生を対象とした新入生面談とにおいて、2年生以上にはそれぞれが所属する演習（ゼミ）において、専任教員が直接、履修上の注意を行うとともに、学生からの履修上の相談にも応じている。
- ・1年生には、11月にゼミ説明会を開催し、ゼミ選択・履修の相談にも応じている。

【地理学科】

- ・新入生が履修を決めたり、登録手続きをする際に混乱するのを軽減するため、新入生向けに地理学科在学生による履修ガイダンスを実施している。
- ・新入生を対象に5月～6月にかけて、全教員に学生を振り分けて個別に「新入生面談」を行い、学習の状況や生活について相談を受け、適宜学科会議で情報共有し、対応を検討している。
- ・秋学期に行っている地理学科オリジナルの卒論ガイダンスにおいて、卒業論文指導教員の選択手続の方法や、卒論作成にかかわる具体的な要領について詳しく説明している。
- ・地理学科オリジナルの葉を配付し、文学部履修の手引きに書かれていない地理学科教員の詳しい紹介や取得できる資格などについて説明している。また、地理学科ウェブサイトにおいて、葉の内容に加え、最新の情報についても提供している。

【心理学科】

- ・1年生に対しては、専任教員によるグループ面談、心理学科の上級生で構成するピアサポーターによる履修講習会を通じて履修指導を行っている。学科のカリキュラムなどを解説した独自の資料もオリエンテーションで配付している。
 [注] ピアサポート・システムとは、ピアカウンセリングを活用したもので、互いの人間的成長能力を信じ、「支援する存在」でもあり「支援される存在」でもあるという互恵性を高めることによって、学習環境をポジティブな風土にし、個々の学生の能力を伸ばすシステムである。ピアサポーターは、活発な活動を行っている。
- ・2～4年生に対しては、学科のカリキュラムを解説した独自の資料を作成し、在学生ガイダンスで配付している。
- ・2年生に対しては、ピアサポーター主催のゼミ説明会も行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

【日本文学科】『卒業論文執筆のてびき 第7版』、留学生サポート小委員会履修相談資料

http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page_id=1153

<http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2016/04/0602e18f0b2205f5eccc19dcead869fe.pdf>

【英文学科・史学科】 在学生ガイダンス配付資料

【地理学科】『地理学科の葉』、<http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/>

【心理学科】 心理学科新入生オリエンテーション配付資料、心理学科在学生ガイダンス配付資料

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

※取り組み概要を記入。

すべての専任教員がオフィスアワーを設け、面会時間・場所を『文学部講義概要（シラバス）』に公開し、個々の学生へ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基礎的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

の学習相談に対応している。

また、各学科とも1年生に対しては「基礎ゼミ」等において、2年生以上に対しては「ゼミナール」「演習」を通じて、担当教員による学習指導が行われている。

さらに、4年生に対しては、必修の卒業論文を通じて、指導教員による研究指導が行われている。その指導計画については、『文学部講義概要（シラバス）』において公開されている。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部履修の手引き』

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。

S A B

※取り組み概要を記入。

履修登録単位数の上限を、再履修単位を含めて49単位と定め、計画的な単位履修の指導に加え、学生が授業時間外の学習時間を確保できる方策をとっている。個別の科目については、担当教員が各回の「授業計画」「授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）」「参考書」をシラバスに記載し、予習・復習の時間を設けるよう適切に指示・指導している。また、講義科目においては適宜レポート等を課して授業外学習の時間を増やすほか、小テストの実施などを通して予習・復習の促進も図られている。「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、レポート執筆や口頭発表に向けた調査・研究を授業外に実施するほか、必要に応じて学生同士のサブゼミも開催されている。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』

④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S A B

【**具体的な科目名および授業形態・内容等**】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

・文学部ではアクティブ・ラーニングを「講義内容に関連して、学生が書く、話す、発表するといった能動的活動を行い、気づき、発見、認知の変化などが確認できる、あらゆる学習活動である」ととらえ、「基礎ゼミ」「ゼミナール」「卒業論文」のみならず、各種授業においても、学生がこのような学習活動を実践できる仕組みを積極的に導入することを心がけている。

・大教室における講義科目でも、リアクション・ペーパーや授業支援システム等を活用した双方向型の授業形態を積極的に導入し、アクティブ・ラーニングが実現できるように努めている。

そのほか、各学科の特色ある取り組みは以下のとおりである。

【**哲学科**】

・一部の「哲学演習」では、受講生の発表をパワーポイントによるプレゼンテーション形式で実施し、哲学の内容を概念図に変換する能力を養成している。

【**日本文学科**】

・「編集実務A・B」で、学生は、DTPソフトを使用して書籍や雑誌の誌面デザインを行ったり、小冊子の制作を行ったりしている。

・複数の「ゼミナール」で、学生は、直接、古典籍（写本や版本）に触れて研究を行っている。

・複数の「ゼミナール」で、学生は、論文や小説などを編集し、ゼミ誌を作成している。

【**英文学科**】

・「英語表現演習（Speaking）」「英語表現演習（Writing）」のうち6つ（入学者数が多い学年については8つ）をクラス指定の授業として設定し、クラス指定制度の徹底化を図り、履修希望学生全員に受講を保証している。

【**史学科**】

・「基礎ゼミ」「演習」のほか、実習系科目群のなかで、PBL、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。

【**地理学科**】

・「基礎ゼミ」「現地研究」「演習」のほか、実習系科目群のなかで、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。

【**心理学科**】

・授業における先進的取り組みについては下記根拠資料にまとめている。そのほか、2016年度からは「心理学測定法Ⅰ」と「演習Ⅱ」で、新たにビデオ教材を用いた反転授業を取り入れている（情報メディア教育研究センターとの共同事業）。また、多くの授業で学生による発表などアクティブ・ラーニング実施している。

【**2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等**】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

第6回文学部定例教授会において教員向け研修会「主体的な学びを刺激する」（講師：川崎貴子氏、林容市氏。ともに

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

文学部専任教員)を開催し、アクティブ・ラーニング等の効果的な授業方法の導入事例が報告され、教員間で共有した。また、文学部質保証委員会がアクティブ・ラーニングに関する調査を行い、第8回文学部定例教授会において自己点検・評価活動における評価方法、アクティブ・ラーニング実施後の効果の測定方法に関する提言を行った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部講義概要(シラバス)』

・2018年度第6・8回文学部定例教授会議事録

【地理学科】『地理学科の葉』、<http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/>

【心理学科】「2015年度 心理学科 アクティブ・ラーニング、PBL 導入事例」報告書(2016年度心理学科会議資料)

⑤それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S A B

※どのような配慮が行われているかを記入。

各学科とも「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、少人数教育を徹底するため、履修者の選抜や科目間での履修者数の調整等を行っている。また、ILAC科目の英語においては1授業あたり24名を履修者の上限とし、諸外国語においても1授業あたりの履修者の上限を設けている。

そのほか、各学科では以下のような配慮を行っている。

【日本文学科】

必修科目(「日本文芸学概論A・B」「日本語学概論A・B」「日本文芸史IA・B」)・コース別必修科目(「文学概論A・B」「日本文芸史IIA・B」「日本語史A・B」「日本文法論A・B」「日本文章史A・B」「文章表現論A・B」)では、昼間・夜間に関し授業を1コマずつ開講し、履修者が最大でも150名程度になるよう配慮している。

【英文学科】

ゼミと異なり、授業間で内容が大幅に異ならないと想定される「英語表現演習」について、各コマの最大履修者人数の上限を40名とするよう、担当教員に依頼している。

【史学科】

実習系の「日本考古資料学」「日本近世史料学」等では、学生の専攻を優先して履修者を選抜することで、規模の適正化を図っている。

【地理学科】

実験・実習科目において、履修者数が10名を超える場合、TA(教育補助員)を1名配置し、円滑な実験・実習が行えるようにしている。また、必修科目の「地理実習(1)・(2)」や選択必修の「地学実験(1)・(2)」では、履修者を二つのクラスに分けて春秋で(1)・(2)の履修の順番を代えて受講することで実験室の収容数以内で実習できるようにしている。

【心理学科】

「心理学基礎実験I・II」「心理学測定法I・II」「心理検査法I・II」「心理統計法実習I・II」「情報処理技法I・II」においてはクラス指定制をとり、1授業あたりの履修者が30~40名程度になるように調整している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部講義概要(シラバス)』

【哲学科】「哲学演習」の受講者制限について(配付プリント)

【日本文学科】ゼミ説明会配付資料

【心理学科】「心理学科在学生ガイダンス配付資料」

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

【確認体制および方法】※箇条書きで記入。

・学期ごとに、すべての専任・兼任教員に成績評価・単位認定基準を通知している。

・すべての科目の成績評価・単位認定基準は『2017年度文学部講義概要(シラバス)』に公表されている。

・GPCA集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認している。

・学生に対して成績調査の申請機会を保証し、教授会では必要に応じて成績訂正について審議している。

そのほか、各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

・「哲学演習」として開設されている11の演習科目をはじめ、ゼミ科目では、単位認定および成績評価の基準を学科内で統一している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>【日本文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オムニバス授業「日本文芸学概論 A・B」(必修科目)の成績評価は、学科会議の審議事項としている。 ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」では、各クラスで成績評価の割合に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえ、成績を決定している。 <p>【英文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「基礎ゼミ」では、複数クラス間で成績評価に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえで成績を決定している。 ・卒業論文の評価基準をあらかじめ公開している。 <p>【史学科・心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シラバス以外でも、卒業論文の審査基準を文書化し、あらかじめ公開している。 <p>【地理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業論文の評価を全教員で協議のうえ決定している。 <p>【心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業論文の口述試験を学科全体の発表会形式で実施し、その成績を全教員が協議のうえ決定している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要(シラバス)』 <p>【日本文学科】 学科会議資料、「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料</p> <p>【史学科】 「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」(卒業論文ガイダンス配付資料)</p> <p>【心理学科】 「法政大学人文科学研究科心理学専攻修士論文/文学部心理学科卒業論文評価表」 (http://www.hosei-shinri.jp/psychology/documents/thesis-evaluation-form.pdf)</p>	
② 厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>厳格な成績評価を行うため、各科目では試験、レポート、口頭発表等にもとづく評価を実施し、その方法もシラバスを通じて告知されている。担当教員もそれを踏まえ、成績評価を行っている。また、GPCA集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認できる仕組みをとっている。教授会においても、学部長より全学的なGPCAの傾向が適宜報告されている。</p> <p>なお、講義科目におけるA+の付与は、認定単位のうち20%以内を目途とすることが、申し合わせられている(地理学科の「現地研究」においては、A+の付与は履修者の上位10%程度に収めることとしている)。</p> <p>そのほか、特定の科目の成績評価に対する厳格な方法については、前記1.3①参照。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『文学部講義概要(シラバス)』 ・2018年度第8回文学部定例教授会議事録 ・2010年度第12回文学部定例教授会議事録 	
③ 学生の就職・進学状況を学部(学科)単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の就職・進学状況については、教授会においてキャリアセンターによる報告をすべての専任教員で共有することとしている。 ・その他、学科会議においても、学生の就職・進学状況について報告・確認がなされている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018年度第3回文学部定例教授会議事録 	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
① 成績分布、進級などの状況を学部(学科)単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績分布については、GPCA集計表を各学科により個々の教員が確認できる状態になっている。 ・進級・留級については、3月の教授会の審議事項としている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018年度第11回文学部定例教授会議事録 	
② 分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

※取り組みの概要を記入。

文学部では、各学科の専門分野における研究方法の習得と、それにとまなう課題発見・解決力、思考力、調査力、また、それらを説得力をもって発信するための文章力、プレゼンテーション能力を有する学生に対し、学位を授与する方針をとっている。そのため、「ゼミナール」「演習」ではレポートと口頭発表を課し、「卒業論文」では単位修得に必要な要件を定めている。なお、上記以外の各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

哲学的な議論や主張ができるための正確な文章力の習得を重要な教育上の目標として、3～4年次の演習授業の前提として2年次学生向けに「基礎演習」を実施し、レポート作成を通じた文章力の養成・指導に取り組んでいる。

【心理学科】

卒業論文の具体的な評価基準を『法政大学人文科学研究科心理学専攻修士論文／文学部心理学科卒業論文評価表』として学科のHPに公開し、研究の指導と論文の評価に活用している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』

③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。

学生の学習成果の把握・評価は、シラバスに明示したとおり、講義科目においては期末試験、レポートを通じて行われるほか、随時、小テストやリアクション・ペーパーを通じても行われている。「ゼミナール」「演習」においては口頭発表、討議、レポートを通じて行われている。また、文学部では卒業論文が必修であるため、4年間の学習成果は論文本体および口述試験によって、把握・評価が可能となっている。レポート、口頭発表、卒業論文への取り組み、評価にあたり、ルーブリックの使用が広まりつつある。なお、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。

【地理学科】

教員免許、測量士補、地域調査士等の資格取得者数等の調査を毎年度実施している。

【心理学科】

個々の学生が取り組む卒論研究については、研究計画書を提出し、倫理審査を受けることを義務付けており、この段階で全教員が全学生の研究計画書を読んでいる。倫理審査の目的は研究計画の適切さを評価することにあるが、同時にこの仕組みは、研究対象や研究方法に関する理解度や計画書の作成技術など、個々の学生のそれまでの学習成果を把握するのにも役立っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部講義概要（シラバス）』

④学習成果を可視化していますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポर्टフォリオ等。

各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・卒業論文タイトル一覧の公表。
- ・一部の「哲学演習」における卒業論文反省会の実施（卒論面接審査後に4年生が他の4年生及び3年生に向けて自身の卒論内容と執筆上の反省点等を報告）、卒論論集・卒論要旨集の作成。
- ・一部の「哲学演習」では、ゼミ発表と配付資料、ゼミ活動をDVDに収録し、配付。
- ・「国際哲学特講」では毎年の研修成果を学科ホームページ上で公開。

【日本文学科】

- ・優秀卒業論文・卒業制作を学科発行の学術雑誌『日本文学誌要』・文芸雑誌『法政文芸』で公表。
- ・「ゼミナールレポート集」「卒業論文集」「創作作品集」を作成し、「ゼミナール」における学習成果を公表。

【英文学科】

- ・年度末発行の学内誌『SMILE』に卒業論文論題一覧を公表、さらに各分野の優秀論文を掲載。
- ・学科生の団体Linksにおいて、学生がゼミでの学習状況等を発表。
- ・学科SA報告会において海外留学の成果を発表。

【史学科】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基礎的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・学科内学会の雑誌『法政史学』に卒業論文の題名一覧を公表。 ・全国学会の主催する優秀卒業論文発表会への推薦（具体的には地方史研究協議会が主催する「日本史関係卒業論文発表会」）。 <p>【地理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学科と卒業生と学生で組織する学会が連携した卒業論文発表大会の実施。各ゼミ活動についてもポスターにて発表。 ・全国地理学専攻学生卒業論文大会へのエントリー。 ・『法政地理』への優秀卒業論文の投稿。 <p>【心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業論文の発表会でのプレゼンテーションに加え、研究成果をA4判1ページの要旨としてまとめて配付するほか、法政大学心理学会の定期刊行物「法政心理学会年報」で公表。 	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>【哲学科】 https://philos.ws.hosei.ac.jp/</p> <p>【日本文学科】『日本文学誌要』『法政文芸』</p> <p>【英文学科】『SMILE』『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配付パンフレット）</p> <p>【史学科】『法政史学』、http://chihoshi.jp/?p=1877（第60回日本史関係卒業論文発表会・2019年4月開催・於駒澤大学）</p> <p>【地理学科】『法政地理』、http://www.chiri.info/index.html</p> <p>【心理学科】「修士論文・卒業論文要旨集」『法政心理学会年報』</p>	
<p>1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。</p>	
<p>①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。</p>	<p>S A B</p>
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>学期末に「学生による授業改善アンケート」を実施し、各教員がそれを授業内容にフィードバックすることで、授業内容とシラバスの整合性を、学生の学びの立場に立ってチェックする体制をとっている。また、毎年実施される「卒業生アンケート」の集計結果をすべての専任教員が教授会において把握する方策をとっており、その結果を教育課程、内容、方法の改善に役立てている。加えて、「学生モニター制度」を実施し、学生の意見・要望も聴きとることにより、教育課程、内容の改善に生かす方策もとっている。</p> <p>また、各学科では学科会議やFDミーティングにおいて、学習成果の検証とそれにもとづく教育課程・内容・方法の改善について審議している。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018年度第11回文学部定例教授会議事録 	
<p>②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。</p>	<p>S A B</p>
<p>※利用方法を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生による授業改善アンケートの結果を各教員が生かし、そこから気づいたこと、授業改善に役立てたことを『文学部講義概要（シラバス）』のうち、「学生の意見等からの気づき」の項目で公表している。 ・教学改革委員会および各学科の学科会議で、授業改善のための検討資料として利用することがある。 ・必要時には、各学科が執行部より学科ごとの「自由記述欄」のデータの提供を受け、現状把握にあたることがある。 ・ただし、現行のアンケートは評価・回答方法のあり方、回答率の低さなどから、教育課程や教育内容・方法の組織的改善のためには利用しにくいという声もある。 	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『文学部講義概要（シラバス）』 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・学部および各学科のPDCAサイクルが円滑に機能し、カリキュラムの点検を不断に行い、教育改善に努めている。 	1.1①
<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の編成・実施方針にもとづき、「ゼミナール」「演習」「卒業論文」を必修とするほか、こ 	1.1①②

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

れらに対応する基礎力を養成するための「基礎ゼミ」等を開講している。	
-----------------------------------	--

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

①教育課程・教育内容に関すること (1.1)

文学部では、学生の能力育成のため、順次性・体系性のある講義科目の他、年次ごとにゼミナール科目を開講するなど、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されている。また教育課程の中に ILAC 科目や他学部公開科目を含めるなど、幅広い教養を身につけ、豊かな人間性と国際性を涵養するための学部の枠を越えた教育内容も提供されている。キャリア教育に関しては、「文学部生のキャリア形成」や学科ごとの科目を設置し、文学部生としての立場を生かした社会的・職業的自立を図るための教育が行われている。

高大接続に関しては、付属校一校との間で一部の専門科目の聴講を認めているが、意欲ある生徒により多くの機会を提供できるよう、対象となる高校や受け入れ科目の拡大が期待される。

②教育方法に関すること (1.2)

文学部では、学部全体のオリエンテーションやガイダンス、学科ごとの面談などを通じて、学生の履修・学習指導が適切に行われている。学習時間に関しては、シラバスで指導を行うとともに、小テストやレポート、口頭発表によって授業外の学習時間が確保されている。年次ごとのゼミやサブゼミ、大教室授業におけるリアクションペーパーや授業支援システムによる双方向型授業は、学部の教育目的を達成するための効果的な授業形態となっている。

一授業あたりの学生数については、少人数教育が求められる演習形式の授業において、履修者の選抜や科目間での履修者数の調整等の配慮が行われている。

③学習成果・教育改善に関すること (1.3～1.5)

文学部における成績評価と単位認定の基準はシラバスを通じて公表され、その適切性はGPCA集計表を通じて確認されている。必修科目や卒業論文では成績評価に不均衡が生じないよう、学科ごとに協議を行い、平準化を行っている。また成績評価の厳格さと透明性を保証するため、受講生には成績調査の機会を与えている。

学生の就職・進学状況については、キャリアセンターによる報告書等について教授会および学科会議で報告・共有されている。

学生の成績分布については、GPCA集計表によって各学科ごとに確認が行われており、進級状況については、年度末の教授会で審議することが制度化されている。

文学部という分野の特性に応じた学習成果を測定するため、正しく説得力ある文章力を身につけることを指標として、ゼミや演習での指導が行われている。

学習成果の集大成である卒業論文は、学内誌などにタイトルの一覧や優秀論文が掲載され、可視化が図られている。一部の学科では、優秀論文を全国学会にも推薦しているが、こうした試みがさらに拡大し、成果を上げることを期待したい。

教育の内容・方法の改善については、「学生による授業改善アンケート」によって各教員に授業内容とシラバスの整合性などの気づきを促すほか、「卒業生アンケート」の集計結果を教授会で報告・共有したり、「学生モニター制度」を活用して学生からの意見を聴取したりするなど、組織的、制度的な取り組みが行われている。

2 教員・教員組織

【2019年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・「専任教員による授業相互参観」を実施している。
- ・教授会および各学科においてFD研修会・ミーティングを実施している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【2018年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。</p> <p>【教授会における研修会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018年6月20日（第3回文学部定例教授会）、教員向け研修会「文学部生のキャリア形成に向けて—現状と課題—」、講師：森田友幸氏・古田美智子氏（(株)リクルートキャリア）、藤野吉成氏（法政大学キャリアセンター）、59名 ・2018年10月17日（第6回文学部定例教授会）、教員向け研修会「主体的な学びを刺激する」、講師：川崎貴子氏、林容市氏（法政大学文学部）、61名 ・2019年2月27日（第10回文学部定例教授会）、ハラスメント研修会、講師：小池邦吉氏（ハラスメント相談室顧問弁護士）、吉井由佳氏（同専門相談員）、59名 <p>【各学科におけるFDミーティング】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・哲学科4回、日本文学科2回、英文学科5回、史学科2回、地理学科4回実施。授業内容、指導方法の向上に関する意見交換を行った。 	
<p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>教授会において3回、教員研修会を開催した。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018年度第3・6・10回文学部定例教授会議事録 ・2018年度教員による授業相互参観実施状況報告書 	
<p>②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>全学で定められている「個人研究費」等の研究費の支給・執行・精算を学部事務課文学部担当で管理し、教員の研究活動を支援している。学会等を本学で開催する場合には、教授会でも開催を承認し、大学の補助を得られるよう支援している。学内の付置研究所に兼任所員や運営委員を選出し、当該教員の研究活動を支援するほか、大学全体の研究力向上にも努めている。</p> <p>『法政大学文学部紀要』を年2回刊行し、教員の研究成果の発表の場を設けている。また、各学科でも学内学会を組織し、研究発表会の開催、研究誌の刊行を行っている。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『法政大学文学部紀要』『法政哲学』『日本文学誌要』『英文學誌』『法政史学』『法政地理』『法政心理学会年報』 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・教授会の場を活用して教員向け研修会を積極的に行うとともに、各学科においても自律的にFDミーティングが実施されている。 	2. 1①

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・特になし。 	

【この基準の大学評価】

<p>文学部のFD活動の一環として、昨年度は教授会の場を利用して計3回の研修会が行われ、また各学科でも年2～5回、授業内容や指導方法の向上のための意見交換会が行われており、適切かつ組織的な活動が行われている。</p> <p>学部の紀要のほか、学科ごとの研究誌を発行することで、教員の研究活動の活性化や資質向上を図るとともに、その成果を社会に向けて継続的に発信している。</p>
--

III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	<p>体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリ</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		キュラムのあり方についても検討する。	
	年度目標	①各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。	
	達成指標	①カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）を検証するための学科会議を開催する。	
No	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	各学科の学科会議において、カリキュラム、教育内容を検証した。また、その結果、第6・8回教授会において、日本文学科・英文学科・心理学科のカリキュラムの一部改正を行った。
		改善策	－
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	各学科において、カリキュラム、教育内容について検証し、必要に応じて改編を行うという目標は、適切に達成された。
		改善のための提言	より一層の向上のために、継続的に検証を行っていくことが大切である。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
2	年度末報告	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。
		年度目標	②HOSEI2030 キャンパス再構築特設部会の答申を受け、学部教育の「大括り化」に向けた議論に着手する。
		達成指標	②HOSEI2030 キャンパス再構築特設部会の答申を受けて審議を開始し、「大括り化」実現のための施策の立案の手順について合意を得る。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	C
		理由	HOSEI2030 キャンパス再構築特設部会市ヶ谷ワーキンググループにおける審議内容の報告がなされなかったため（2019年2月時点）、「大括り化」実現のための審議に着手できなかった。
		改善策	HOSEI2030 キャンパス再構築特設部会市ヶ谷ワーキンググループにおける審議内容の報告がなされた時点で、「大括り化」実現のための審議を開始する。
年度末報告	質保証委員会による点検・評価		
	所見	学部教育の「大括り化」実現のための審議に着手できなかったことは、HOSEI2030 キャンパス再構築特設部会市ヶ谷ワーキンググループより報告書が現時点で出されていないことを考えれば、致し方のないことである。	
年度末報告	改善のための提言	今後、同ワーキンググループや次年度発足する市ヶ谷地区の学部長の会議体で、積極的な取り組みを進めるよう、文学部より働きかけるべきである。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
3	年度末報告	中期目標	学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、ゼミナール以外の科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。
		年度目標	100分授業の実施にとまない、講義科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例に関する情報を共有する。
		達成指標	教授会において研修会を開催する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
年度末報告	理由	第6回教授会において、川崎貴子教授・林容市専任講師による研修会「主体的な学びを刺激する」を開催し、アクティブ・ラーニング等に関する情報共有を教員間で行った。また、文学部質保証委員会において、他大学のアクティブ・ラーニングの実例を調査したうえで、その効果の検証方法等に関する提言をまとめ、第8回教授会で報告した。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		改善策	－
		質保証委員会による点検・評価	
	所見	先進的な取り組みを行っている教員に講師を依頼して、アクティブ・ラーニングに関する研修会を開催した点、および、文学部質保証委員会によるアクティブ・ラーニングに関する提言を教授会で報告した点は、非常に高く評価できる。	
	改善のための提言	－	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
4	中期目標	学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、ゼミナール、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。	
	年度目標	学習ポートフォリオ、学生アンケート、ルーブリック等の導入事例に関する情報を共有する。	
	達成指標	教授会において研修会を開催する。	
		教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B	
	理由	十分な時間の確保ができず、学習成果の測定に関する研修会を教授会で行うことができなかった。そのため、教員には第23回大学評価室セミナー「グローバル時代の専門教育と教養教育の統合を目指して～学習成果の把握と内部質保証の観点から～」への参加を促した。	
	改善策	次年度、学習成果の測定にかかわる研修会を教授会において実施する。	
		質保証委員会による点検・評価	
	所見	学習成果の測定方法に関する研修会を開催できなかったことは残念である。ただし、アクティブ・ラーニングに関する研修会において、「ゼミ活動等を対象とした学生向けルーブリック」について説明がなされた点、第23回大学評価室セミナーにおける講演を受け、学習成果の測定が多様で総合的なものであるとの認識を執行部がもった点は評価できる。	
	改善のための提言	次年度は、学習成果を測定することの意義を根本から問い直す研修の場を設けることを期待する。	
No	評価基準	学生の受け入れ	
5	中期目標	学部および各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の各種入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、一般入試の出題形式、特別入試の試験形式等の見直しを図る。	
	年度目標	2019年度一般入試・特別入試（特に外国人留学生入試）の変更点の効果を検証し、2020年度入試の改革へ反映させる。	
	達成指標	入試小委員会において左記を検証し、2020年度入試への改善提案を行う。	
		教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A	
	理由	第5回入試小委員会において、2020年度入試に向けての意見交換が行われた。今年度変更された特別入試制度における外国人留学生入試について、面接シートのより効果的な活用に関する検討等がなされた。	
	改善策	－	
		質保証委員会による点検・評価	
	所見	外国人留学生入試において、昨年度までは地理学科のみが取り入れていた総合科目を全学科で取り入れた。この改正にともなう効果の検証をめぐっては、前年度に対して応募者は微減にとどまったという点において、一定の効果があったことが検証されたことになる。	
	改善のための提言	外国人留学生入試で入学した学生の学力面での効果の検証が、次年度には求められる。外国人留学生入試についても、継続して検討してほしい。	
No	評価基準	教員・教員組織	
6	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。	
	年度目標	年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。	
No	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	第1回人事委員会において、専任教員の年齢構成について確認を行った。また、年齢・性別・国際性を考慮した新規採用人事が行えた。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	哲学科（若手）・日本文学科（中国、女性）・英文学科（若手、在外経験が非常に長い）において、新規採用人事が行われた。年齢、国際性、性別について多様性豊かな採用人事となった。
		改善のための提言	各学科が年齢・性別・国際性を考慮し、結果として教員組織の多様性を考慮した人事を行えたことは評価できる。今後もこうした人事が継続されることを望む。
No	評価基準	学生支援	
7	年度末報告	中期目標	①成績不振学生、外国人留学生、体育会学生等への個別指導を丁寧に行う。
		年度目標	①成績不振学生への丁寧な個別指導を行うだけでなく、成績不振理由を調査し、理由ごとの対応のあり方について検討する。
		達成指標	①成績不振学生への個別指導に関する指針を作成し、それにもとづき、春学期・秋学期とも個別指導を行い、結果を教学改革委員会で報告する。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	第1回教授会において、成績不振学生への対応の要項（「2018年度成績不振学生に対する対応について（依頼）」）を提示した。それにもとづき、各学科で春学期・秋学期に対応を行い、それぞれ第3回学科主任会議・第5回教学改革委員会において、報告と対応内容の検討を行った。
		改善策	—
質保証委員会による点検・評価			
所見	成績不振学生への対応の要項を作成し、それにもとづき、春学期・秋学期とも個別指導を行った点、その結果を学科主任会議・教学改革委員会で報告し、対応内容を検討した点は望ましい。		
改善のための提言	次年度も、継続的な調査と対応の実施を期待する。		
No	評価基準	学生支援	
8	年度末報告	中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。
		年度目標	②キャリア支援をめぐる学部の課題を抽出し、問題点の共有化を図る。
		達成指標	②執行部とキャリアセンターで協働して課題を精査し、教授会で報告を行う。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	第3回教授会において、キャリアセンター藤野吉成氏、(株)リクルートキャリア森田友幸氏・古田美智子氏による研修会「文学部生のキャリア形成に向けて—現状と課題—」を開催し、文学部生のキャリア形成に関する課題について理解を深める場を設けた。
		改善策	—
質保証委員会による点検・評価			
所見	教授会において、キャリア形成に関する報告会・研修会を行い、キャリア支援をめぐる問題点を共有した点は評価できる。その際、学生のキャリア支援を扱う企業より講師を招聘した研修が行われた点は、特筆に値する。		
改善のための提言	—		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

9	中期目標	社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学修の機会を提供するよう努める。	
	年度目標	社会人入試制度（編入試験を含む）、社会人向けプログラム、履修証明プログラム等の諸制度について検討を行う。	
	達成指標	教学改革委員会、入試小委員会において左記の検討を行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	第3・4回入試小委員会において、他大学の社会人入試制度に対する分析と、本学部での導入についての検討を行った。
		改善策	－
		質保証委員会による点検・評価	
所見		社会人入試制度について検討を行うという目標は適切に達成された。	
改善のための提言		今後は、社会人向けプログラム、履修証明プログラム等についても検討が行われることを望む。	
<p>【重点目標】</p> <p>〔年度目標〕100分授業の実施にともない、講義科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例に関する情報を共有する。</p> <p>〔施策〕2018年度第5回教授会において、有効な取り組みを実践している教員を講師としたワークショップを実施する。</p> <p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>「教育課程・学習成果」のうち、「教育課程に関すること」「教育方法に関すること」については、目標を達成した。特に、後者については研修会の開催により、十分な成果をあげたものとする。なお、「大括り化」に向けた議論は着手できなかったが、これは HOSEI2030 キャンパス再構築特設部会市ヶ谷ワーキンググループの審議内容の報告がなされなかったことによるもので、やむを得ないことである。「教育課程・学習成果」のうち、「学習成果に関すること」については、学習成果の測定方法に関する研修会を予定していたが、時間の確保ができなかったことから実施できず、次年度に課題を持ち越すこととなった。「学生の受け入れ」「教員・教員組織」「学生支援」「社会貢献・社会連携」についても概ね目標を達成した。特に、「学生支援」において、企業と連携してキャリア支援をめぐる研修会を実施したのは例年にない試みであった。</p>			

【2018年度目標の達成状況に関する大学評価】

<p>文学部の教育方法や学生支援の課題については、教員向け研修会を開催し、現代の教育課題に関する情報を共有するなど組織的な取り組みが行われ、年度目標が達成されたことは高く評価できる。</p> <p>一方、2018年度は未達成となった HOSEI2030 キャンパス再構築特設部会の答申を受けた学部教育の「大括り化」実現のための議論や、学習ポートフォリオやルーブリックなどの効果的な学習成果の測定方法を導入するための研修会は、いずれも重要な課題であるため、今後の実施や検討が期待される。</p>
--

IV 2019年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。
	年度目標	各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。
	達成指標	カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）を検証するための学科会議を開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、ゼミナール以外の科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。
	年度目標	講義科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例に関する情報を共有する。
	達成指標	教授会において情報共有の機会を設ける。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、ゼミナール、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。
	年度目標	「学習成果の測定」に関する定義、先行事例、課題について情報を共有する。
	達成指標	教授会において研修会を開催する。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	学部および各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の各種入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、一般入試の出題形式、特別入試の試験形式等の見直しを図る。
	年度目標	2019年度入試の実績と効果、特別入試（特に外国人留学生入試）の変更点の効果を検証し、2020年度入試の改革へ反映させる。
	達成指標	執行部より入試経路ごとの入学実績、成績状況に関する情報提供を行い、入試小委員会、学科会議で入試改革について検討する機会を設ける。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
	年度目標	年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。
	達成指標	人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	①成績不振学生、外国人留学生、体育会学生等への個別指導を丁寧に行う。
	年度目標	①成績不振学生へ丁寧な個別指導を行うとともに、面談に応じない学生に対しても適切な対応を図り、学習を支援する。
	達成指標	①春学期・秋学期とも個別指導を行い、結果を教学改革委員会で報告する。また、面談に応じない学生に対しては、郵便による個別通知を実施する。
No	評価基準	学生支援
7	中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。
	年度目標	－
	達成指標	②教授会において研修会を行う。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学習の機会を提供するよう努める。
	年度目標	社会人へ学習の機会を広げる方策として、転・編入試験における社会人入試制度等の導入の検討を行う。
	達成指標	教学改革委員会、入試小委員会において左記の検討を行う。
【重点目標】 [年度目標]「学習成果の測定」に関する定義、先行事例、課題について情報を共有する。 [達成指標] 教授会において研修会を開催する。		

【2019年度中期・年度目標に関する大学評価】

カリキュラム、教育内容を検証する学科会議を開催し、時代の変化に対応したカリキュラムの見直しを行うとともに、教授会においてアクティブ・ラーニングや双方向型授業のさらなる導入のための情報共有の機会を設けることは、学生の主体的な学びを実現する上で成果が期待される取り組みである。

一方、昨年度未達成となつたいくつかの課題の中、留学生への調査と対策が、成績不振学生や体育会学生等と同列に扱われていることは望ましくないと思われる。社会的・文化的背景を異にする留学生が、学部での学習や卒業後の進路にどのような問題を抱え、また希望を抱いているかを把握し、適切な指導体制を整えることも喫緊の課題であろう。

【法令要件及びその他基礎的要件等の遵守状況】

特になし

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【大学評価総評】

文学部は、各学科の専門性の涵養だけでなく、学問的成果を説得力ある文章にする力を育成することにも重点を置いている。多くの学生にゼミでのレポートや卒業論文を通じてこうした指導を行うことは、教員にとって大変な負担であろう。会議や自己点検・評価作業の合理化により、教員の負担の一部が軽減されたことは望ましい。学習成果の可視化に関しては、優秀論文を学内誌に掲載したり、全国学会へ推薦するという現在の取り組みは、学生に具体的な目標と手本を示すという意味で意義あるものであり、こうした試みがさらに拡大し、成果を上げることを期待したい。

一方で、留学生の数が増加する中、彼らが学部での学習や卒業後の進路にどのような問題を抱えたり希望を抱いているかを把握し、指導体制を整備することは喫緊の課題であろう。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。